

国語問題

注意事項

1. 試験開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題の冊子は 24 ページです。落丁、乱丁、印刷不鮮明などの箇所がある場合には申し出てください。
3. 問題冊子および解答用紙が配布された後、解答用紙の所定欄に座席番号・氏名を正確に記入し、座席番号についてはその番号を正しくマークしてください。
4. 解答は必ず解答用紙の指定された箇所に正しくマークしてください。マーク箇所を誤った解答は無効です。
5. マーク解答欄記入上の注意

- (1) 解答は指定された解答欄にマークし、その他の部分には何も書かないでください。例えば、**20** と表示のある問いに対して、**③**と解答する場合には、次の例のように**解答番号 20**の**解答欄**の**③**にマークしてください。

例

良い例	悪い例	解答欄															
		解答 番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
20		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	

- (2) 複数の解答がある場合も、同じ解答欄にマークしてください。ただし、指示された解答数より多くマークした場合は、その解答はすべて不正解となります。
 - (3) 解答用紙へのマークはすべてHBのシャープペンシルまたは鉛筆で行い、訂正する場合にはプラスチック製消しゴムで丁寧によく消し、消しきらずはきれいに取り除いてください。
 - (4) 解答用紙は絶対に汚さないでください。また折り曲げたり破ったりしないでください。
 - (5) 解答欄の所定欄以外の余白部分は、何も記入しないでください。記入したり、汚したりすると解答用紙読み取り時の誤読の原因となり、採点できない場合があります。
6. 試験時間中に退場することはできません。
 7. 問題冊子は必ず持ち帰ってください。
 8. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。

I 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

「自分の都合」を第一にして生きる人というのは、失敗や間違いばかりをしでかしています。前提が「自分の思い込み」なのですから、それも仕方がないでしょう。だから世の中には、「美しくなることに失敗したもの」がいくらでもハンラン(ア)しています。美しくなることに失敗しているにもかかわらず、「失敗していない」と言い張っているゴウイン(イ)なものだらけです。

人は、「子供」以外のものを作り出してしまふ、例外的な動物です。「作る」は人間の性さがだから仕方がありませんが、「作る」が簡単になつてしまふとろくなことはありません。

「作る」という簡単な言葉には、いたって複雑なプロセスが隠されています。「作る」が成功して、「出来た！」という「完成」に至るまでには、「失敗」出来ない」という事態が存在するからです。

「石器」というのは、人間が作り出した最も古い道具の一つです。石と石とを叩たたき合わせて作ります——しかしそう書いて、私は自分の書いたことが本当かどうかは分かりません。私には、石器を作ること成功した経験もないし、石器を製作しているところを見たこともないからです。

子供の頃、私は友達と一緒に、石器を作ろうとしました。「自然界で一番固いものは石で、石と石を叩き合わせれば石が割れて、石器を作ることが出来る」と、なにかで知ったか、自分で考えついたかをしたからです。

石同士をぶつけて石を割るのは、容易なことではありませんでした。しかし、握り拳こぶしの倍以上もある大きさの石は、ともかく割れました。そこまでは成功しましたが、その先がさっぱり分かりませんでした。ただ割っただけの石を、どうやって「石器」へと至らしめるのか——子供の私達には、その知識と技術がなかったのです。大きな石を割ることさえも大変で、それを実現させた私達は、「その先」が自分達の経験したことよりもずっとずっと大変なことになるであろうということを、経験的に察知しました。その結果、石器作りは挫折して、私は今に至るまで、「石器の作り方」を知らないままです。

子供の私達が完成を目指したのは、新石器時代の「磨製石器」と言われるものです。私は「石斧おの」のようなものを作ろうとしていました。しかし、私達の作ったものは、旧石器時代の「打製石器」にも至らないものです。「物を作り出す」ということに関して、私達は旧石器時代人以前だったのですが、私達より進んでいた旧石器時代人だって、打製石器を磨製石器に変える技術を持っていませんでした。それが可能になれば、旧

石器時代は終わります。でも、それがなかなか可能にならなかったから、旧石器時代は何千年も続いたのです。

今の私達は「作る」ということに関してあまりにも鈍感になっていて、「作る」ということが、無数の「出来ない」を克服した結果なのだということを忘れていきます。作ることに失敗したら、その結果は「出来ない」で、「作れない」なのです。「作れた!」「出来た!」というのは、その困難を乗り越えた結果の達成で、だからこそ「出来上がったもの」には、「出来上がるまでのプロセス」が刻まれているのです。博物館のガラスの向こうにある磨製石器が「ただの石のかけら」とは違ったものになっているのは、そこに「出来た!」に至るまでのプロセスが刻まれているからです。

新石器時代の人間にとって、磨製石器を作ることが簡単だったかどうかは分かりません。その時代に「磨製石器を作る技術」だけはあったので、すから、もしかしたら簡単だったのかもしれませんが。しかし、旧石器時代を消滅させてしまうような技術は、誕生までに長い時間がかかりました。その技術が登場したとしたり、その技術をマスターしなければ、新石器時代にだって磨製石器は作れません。そして、その技術をマスターしたって、個別の石にその技術を適用し、「よりよい磨製石器を作る」ということになったら、話はまた別です。だから我々は、博物館のガラスケースの向こうにある磨製石器のいろいろを見て、「これはカッコいいが、こっちはそうでもない」などと思うのです。私はそう思いますから、あなたも是非そう思って下さい。

完成したものは一つのフォルムを持っている。完成しないものには、そのフォルムさえ宿らない。そして、完成してフォルムを持ったものには、その先「よし、悪し」という新しい達成基準が生まれる。人が物を作るとするのは、新たなハードルを生み出すことでもあって、技術は「模索とためらいと失敗」の中からしか生まれえない。そうして獲得した技術であっても、「ためらい」という混乱の中で揺れる——揺れなければ、「よりよい」という未知の領域へ届けない。技術は「時間」を内包して、そして更に「ただの技術」として終わったものは、新しい段階に至って捨てられて行く——石器というものは、⁽²⁾それだけのことを私達に教えてくれるのだと思います。

だからなんなのか？

人間は「技術」というものを我が身に備えます。その「技術」は、ただ備えただけでは意味を持ちません。人間には、「技術を適用する」ということが必要とされます。「技術」の獲得には時間がかかって、「技術の適用」には、⁽³⁾ためらいと挫折がつきものです。それは当然のことで、だからこそ、人間の「ものを作る」には時間がかかります。「いいもの」というのは、その、時間とためらいと模索の⁽⁴⁾ケツショウで、だからこそ、昔

に作られたものには「いいもの」が多いのです。

簡単な真理とは、「いいものは簡単に作れない」で、「時間をかけて作られたものは、それなりにいいものになる」です。時間をかけても、「作ることに失敗したもの」は、「もの」になりません。「ものになった」ということは、それ自体で既に「いいこと」で、そのためには、それなりの時間がかかります。ものを作る人間は、時間というものを編み込んで、「作れた＝出来た」というゴールへ至るのです。

昔には「簡単に作れる」という質の技術がありませんでした。だから、ものを作る人間は、時間をかけるしかありませんでした。そして、「ちゃんと作る」をしないと、「作る」がまっとう出来ません。「ちゃんと作る」はまた、「失敗の可能性」を不可避的に浮上させて、「試行錯誤」を当然とさせます。「ためらい」と「挫折」があつて、そのいたるところに口を開けた「失敗への枝道」を回避しながら、「出来た」の待つゴールへ至らなければなりません。「作る」という行為は、葛藤の中を進むことなのです。「ものを作る」という作業は葛藤を不可避として、葛藤とはまた、「時間」の別名でもあります。「時間をかける」とはすなわち、「自分の都合」だけで生きてしまう人間の、「思い込み」という美しからぬ異物を取り去るための行為なのです。「葛藤は、完成のための研磨材」かもしれません。

ところが人間はある時、この「時間がかかる」を、「人間の欠点」と思うようになりました。「欠点だから克服しなければならぬ」と思つたのです。それで、「時間がかかる」を必須とする「人間の技術」を、機械に移し換えようとしたのです。産業革命以降の「産業の機械化」とは、この事態です。

機械化による大量生産は、ものを作る人間から、「ためらい」という時間を奪いました。ものを作りながら、「ためらい」という研磨材でろくでもない「思い込み」を削り落とし、「完成＝美しい」というゴールへ近づけるプロセスを排除してしまいました。つまり、ためらいぬきで、「観念」が現実化してしまうということ(5)です。

そうなつた時、「ためらい」は、「観念」を現実化する前の段階(6)でだけ起こります。「試作」というためらいの期間が終わつたら、「観念」はそのまま、ためらうことなく現実化されるのです。その一直線のプロセスに、もう「ためらい」は存在しません——それが存在することは、ただ「生産ラインの故障」なのです。

ものを作る人間も「試作」をします。そして、「試作」の後の段階になつても、相変わらず「ためらい」を実践します。ためらいながら、その「ためらい」を克服しつつ、「作る」の道を進むのが人間です。しかし、機械に「作る」をまかせてしまった人間は、そのことがよく分からなく

なってしまうました。だから、人の住む町は、「これは美しいはず」「合理的であるはず」「機能的であるはず」という、「観念がそのまま形になつてしまった物」に侵され、それを修正することも出来ぬまま、「美しくない物」をハンランさせているのです。

「産業がどうだ、経済がどうだ」と言われても、これは、人間のあり方、自然のあり方に対しての違いです。「美しいを分かる」を回避した結果の時間的短絡が、この間違いを生みます。間違いは間違いなので、私はこの本を書いているのです。

(橋本治『人はなぜ「美しい」がわかるのか』より。出題にあたって、本文を一部改変した。)

問一 傍線部(ア)・(イ)・(エ)のカタカナは漢字でどう書くか。解答例にならない、それぞれ①～⑩の中から正しい組み合わせとなる漢字を二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(ア) 1

(イ) 2

(エ) 3

(解答例) トクテイ

- ① 得
- ② 徳
- ③ 特
- ④ 匿
- ⑤ 督
- ⑥ 帝
- ⑦ 定
- ⑧ 底
- ⑨ 訂
- ⑩ 呈

答 ③ ⑦

(ア) ハンラン

- ① 範
- ② 反
- ③ 繁
- ④ 汜
- ⑤ 煩
- ⑥ 濫
- ⑦ 覽
- ⑧ 卵
- ⑨ 嵐
- ⑩ 乱

(イ) ゴウイン

- ① 剛
- ② 号
- ③ 傲
- ④ 強
- ⑤ 合
- ⑥ 隱
- ⑦ 飲
- ⑧ 引
- ⑨ 因
- ⑩ 印

(エ) ケツシヨウ

- ① 血
- ② 潔
- ③ 決
- ④ 欠
- ⑤ 結
- ⑥ 証
- ⑦ 唱
- ⑧ 勝
- ⑨ 小
- ⑩ 晶

問二 傍線部(ウ)・(オ)の読みとして正しいものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(ウ) 4

(オ) 5

(ウ) 刻まれ

① タターまれ

② ハグクーまれ

③ ツツーまれ

④ ハサーまれ

⑤ キザーまれ

(オ) 侵され

① マカーされ

② ヒターされ

③ オカーされ

④ ミダーされ

⑤ イナーされ

問三 傍線部(1)「私は今に至るまで、「石器の作り方」を知らないままです」とあるが、筆者がそのように言うのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

6

① 友達と一緒にであればなんとか「打製石器」のようなものを作れたが、それは自分の力ではないと考えているから

② 旧式の「打製石器」はなんとか作ることができたが、作りたかった「磨製石器」はうまくできないままだから

③ 知っているのは見よう見まねで「打製石器」を作ることくらいであり、それ以上はわからないままだから

④ 大昔の石器の作り方など、現代を生きる私たちが決して知ることのできない神秘だとあきらめたままだから

⑤ かつて石器作りに挑戦してみたことはあるものの、途中でその大変さに気づいて断念したままになっているから

問四 傍線部(2)「それだけのことを私達に教えてくれる」とあるが、その内容に含まれないものはどれか。次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

7

- ① どんなに苦勞して仕上げたとしても、その先に「よりよい」という領域が必ず広がっているとということ
- ② 時間をかけて作り上げたものは、どんなものであれ、必ず完成された美しいフォルムを持っているということ
- ③ 型にはまって、改良の試みがなされないような技術は、時間の経過とともに捨て去られてしまうということ
- ④ 新たな達成基準をつぎつぎと克服していくなかで、技術は時間をかけて生み出されていくということ
- ⑤ ためらいながら絶えず改良の余地を模索するプロセスを通じてこそ、「いいもの」が生み出されるとということ

問五 傍線部(3)「技術の適用」にはためらいと挫折がつきものです」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

8

- ① 技術を使って実際にもの作りをする場合、どんなにその技術に習熟していたとしても、緊張など精神的影響が避けられないということ
- ② 技術をもの作りを使用する場合、その技術を適用すべきかどうか悩んだり、使えなくて失望したりすることが不可避であるということ
- ③ 技術を使って実際にもの作りを始めたならば、迷いや挫折も製作過程の一部として楽しむくらいの余裕が求められるということ
- ④ 技術をもの作りを使う中では、「よりよい」ものへ向かうために迷ったり、失敗して落胆したりすることが避けられないということ
- ⑤ 技術を実際にもの作りを使う場合には、その技術をどのようどの程度使うか、確認しながら作業を進めていく必要があるということ

問六 傍線部(4)「ちゃんと作る」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

9

- ① 葛藤しながらも、これ以上はないという完成品を作るためのもの作りをするということ
- ② 「失敗への枝道」を作らず、最短ルートで完成に至るようなもの作りをするということ
- ③ しつかりと時間をかけ、しかも安易に妥協することなく、もの作りをするということ
- ④ 一切改変する必要のない研ぎ澄まされた技術によって、もの作りをするということ
- ⑤ 「人間の技術」を機械に移しかえることにより、短時間でもの作りをするということ

問七 傍線部(5)「ろくでもない「思い込み」」とはどういうものか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

10

- ① 「美しい」ものは偶然にしか生まれないとあきらめ
- ② 「失敗しても構わない」と考えるある意味での無謀さ
- ③ 「できた!」とみなすことに対するためらいの気持ち
- ④ 「くであるはず」という人間の都合による決めつけ
- ⑤ 「いいものは簡単に作れない」という職人らしい考え

問八 傍線部(6)「ためらい」は、「観念」を現実化する前の段階でだけ起こります」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

11

- ① アイデアを製品化するまでには時間がかかるが、機械のスピードで「ためらい」を起こす時間を省略できるということ
- ② できるだけ人間が関与せず機械に任せることで、昔は必要であった「ためらう時間」が不要になり、楽に作れるということ
- ③ 人が関わる試作段階では「ためらい」という表現を使っても、機械で生産する段階に用いるのは不適切であるということ
- ④ 人が関与する段階では完成品を作るための「ためらい」を伴うが、その後は機械が複製を繰り返すだけになるということ
- ⑤ ものを作ることを機械に任せられる時代になったことで、「ためらい」は捨て去られるべき古い技術となったということ

問九 本文の内容と一致しないものを、次の①～⑥の中から二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

12

- ① もの作りにおいては、時間をかけて技術を習得することに加えて、試行錯誤しながらその技術を適用していくことが重要である。
- ② 大量生産されている製品に「美しさ」が欠けている理由は、人間の都合による「思い込み」が十分に削り落とされていないためである。
- ③ しっかりとした造形技術を丁寧にしつくりと習得することによって、人間は次第に失敗することなく美しいものが作れるようになる。
- ④ よいものや美しいものを早く作れるようになるためには、失敗と葛藤を繰り返し、自分独自のやり方を確立することが必要である。
- ⑤ 一定の形を作るだけの単なる技術は、より有効な技術の登場により「形」が得られるようになれば、取って変わられてしまう。
- ⑥ フォームは完成後もくりかえし見直され、「よりよいもの」と「そうでないもの」という新しい基準により、作り変えられていく。

Ⅱ 次の文章(A)・(B)は、ともに伊藤整『若い詩人の肖像』の一部である。文章(A)は、地方から上京した主人公(「私」)が、大学に通いながら才能を生かして文学活動をはじめた頃のものであり、文章(B)はそれより前、つまり東京で詩人としての生活をはじめる前に、郷里において中学校の教師をしていたときのものである。主人公(「私」)は、中学校で教鞭をとった後に、職を辞し大学生となった(当時の学制や教師の任命制度は現在のものと異なっていた)。文章(A)・(B)を読んで後の設問に答えなさい。

(A)

私のこの生活は、六月の中頃に突然断ち切られた。私の父は二三年前から胸を患っていて、私が東京に立つ前には大分悪化していたのだが、いよいよ危険だ、という電報が来た。私は室や荷物をそのままにして、夜汽車で上野を発った。私は青春期に入ってから父とうまく話をすることができなくなっていた。言い争いをするにはほとんど無かったが、私にとっては肉親の父親というものは、肉のつながりの故にうとましいものがあった。私の身にあるいやらしいものは、みな父から伝わり、私の自己嫌悪の気持がみな父のせいであるような気がしていた。

私は夜汽車の三等席の窓際の席に身を寄せて、もう父が危篤であり、生きているうちに逢えないかも知れない、と考えた。父は下士官から昇進して少尉になって退官し、戦争に二度出たので、軍人としてささやかな恩給を取っていた。また村役場に二十年近く勤め、その恩給ももらっていた。しかし若し父が死ねば、それ等の恩給は三分の一ほどに減らされた遺族扶助料になる。それだけでは、母や弟や妹たちが暮して行くのに足りなかった。私は学校をやめて働かねばならないかも知れなかった。学校をやめるのはいいとしても、私は学校を口実にして東京での詩人としての生活を始めたばかりであったので、その生活をやめるのを何よりも怖れた。私は父が生きていてくれることを願った。私は自分の父の犠牲になり、七人もいる弟や妹たちを養うためにだけ働かねばならなくなるのをいまいましいと思った。父の死を悲しむよりも、私は自分のために父がもう少し、もう二年か三年でも生きていることを願った。その考えは自分勝手なものであったので、私はそんな考え方をする自分を厭らしいと思った。そのため私の憂い、私の悲しみは、不透明な汚れたものになり、自分が一層いやらしく忌々しく思われた。

私は座席に坐っていて居心地が悪く不愉快であった。

仙台で客が大分下車し、新しい客が乗り込んで来た。私と向い合って中年の女が坐り、その隣に僧侶じみた口髭のある男が坐った。私の隣の席も中年の女で、三人は連れであった。男は説教じみた言い方で、新興宗教の教理のようなことを喋っていた。聞く人の関心を寄せ集めるように、

(b) ことさら声を高くして言っているその男の話に、私はいつか耳を傾けていた。

その男は中年の、色の白い、よく太った、自信ありげな態度の、新興宗教の説教師で、二人の女はその信者であることが分った。説教師の話は肉親の死んだ時に、遺族のものが死者の霊をどう感じたか、どんな悪い人間が死者の霊に導かれて心を改めたか、ということになった。その話し方には、一度耳を傾けたものの心の弱い所を掴み、引きずりまわし、自分の膝下に引き据えてしまうような奇妙な力があつた。「どんな悪い心がけの人間でも」と彼は言い続けた。「その本来の素直な心の働きに目覚めるとですよ、自分の父、自分の母、自分の兄弟というものの愛情なしでは、人間は一日も生きて行けないことがあります。その人が死んでごらん下さい。どんなにその人が自分にとって大切な人であつたか、それが分つて来ます。死んでしまつてから分るといふのが馬鹿の特徴です。しかし……」

彼がそう言った時、私は突然、いま自分の父が死にかけていること、そしてその父が一度も息子の自分に愛されたという記憶を持たずに死ぬことをさとつた。(中略) たつた今も自分は、自分の都合のために父の早く死ぬことをいまいましいと思つていた。私は「お父さん、ゆるして下さい」と叫び出したくなつた。私は歯を食いしばつた。しかし涙が目から溢れ出した。大学の角帽をかぶり、制服を着た二十四歳の青年がいま汽車の中で泣くのはみつともない、と私は思つた。しかし私の感情はもう溢れ出して、自分の意志で涙を留めることができなかつた。涙は次々と溢れて滴り落ちた。私はハンカチを取り出して涙を拭つた。

二人の女と、その説教師がじろじろと私の方を見た。男はすぐさま、自分の説教師の効果を覺つたようであつた。彼は、ちよつと沈黙した後で、声を高めて言つた。

「人というものは、みな善心を持つていゝるもので、よい話を聞けばよい心が動くものです。私どもは、何の説明を聞かなくても、人が何を苦しんでいるかが、顔を見ただけで分ります。」

私はためらつた。自分はいま、この男の説教によつて改心したと思われている、と私は思つた。それが私にやり切れない思いをさせた。「私は悪い人間でございませう。いまお話をうかがつてそれがよく分りました」と言つてこの男の前に跪くことを、この男はヨキしているのだ、と思うと、私は居たたまらない屈辱感に襲われた。私は自分自身の心の働きで泣き出したのだ。私の心の破れ目が、この男の話で刺戟されたのは事実である。しかしその働きは、本来の私のものだ。父親というものを生理的に忌み嫌う青年の苦しきさなんかお前に分るものか、と私は思つた。

私は涙の溢れている目で、その説教師に向つて言つた。

「私のことは何もあなたの話とは、何の関係もありません。私に構わないで下さい。」

そう言ったときの自分の声が泣声であったことを私は残念に思った。しかしそう言うってから、私は少しずつ落ちついた。私は窓の方に顔をそらしてじっと涙の発作の鎮まるのを待った。私の隣にいた女が、その説教師に向って、

(6) 「強情な人間には、中々お救いが下らないものですからね」と言った。説教師は、何か短い言葉で答えてから黙り込んだ。

私は前にも、中学校の教師をしていた時、酒席で意地の悪いことを同僚の中年の教師に言われた時に泣き出したことがあった。発作的に泣くという経験はこれが二度目であった。馬鹿なことだ、恥かしいことだ、と思いつつながら、私には、ある簡単な言葉で突かれると自己を抑さえられなくなる泣き所があるらしかった。一体それは何だろう。二度とも、自分が軽蔑している人間の単純な言葉使用で私は自己抑制を失ったのだ。一体それは何だろう？ どういうことが私を破れさせることだろう。それが分らない。単純な嘲弄^{ちやうろう}に、それから型どおりのギゼン^{ギゼン}的な説教の形式に、そういうものに私は破られたのだ。それを考えて見よう。泣き出すなどということは、案外機械的な単純なことなのかも知れない。少くとも私の経験では、泣くということは、本当の苦しみや本当の感動とは関係がなかった。それはある特定の場所に鍵をさし込まれると、涙の溜^{たま}っていた室の扉ががちりと開くの似ていた。それを考えて見よう。それが分らなければ自分が文学をやっているのは何のためだか分らなくなる、と私は思った。

(B)

私は将来のことを考えると、いつも不安を感じ、苛^{いらだ}立つことが多くなった。そして私は、来年の春で勤めをやめるのなら、もう今の同僚たちを気にかけるなくてもいいという気持ちになったり、いや何年も何年もこの連中の顔色をうかがってここで暮らさなければならぬのか、と考えたりした。そういう風に動揺している私の態度には、人の癪^{しゃく}にさわる傲慢なところがあつたらしい。(中略) 酒がすすみ、みんなの話が賑^{にぎ}やかになった時、私はひとり不機嫌な気持ちでいた。私は、以前のように同僚の目から自分の気分を隠蔽^{いんぺい}しておくことが出来なくなっていた。話の継ぎ穂が切れて、私の不機嫌が皆の前に露出したような一瞬間に、酒癖の悪い小坂英次郎が、太った赤ら顔で、私をじっと見つめるようにしたが、突然、それまでの話と関係もなく、

「テメエのようなもんはな、東京へ行けば、掃くほど居らあ」と言った。

その言葉は、私が日常、そうかも知れないと不安に思っていたことの真中を言いあてたものであった。私は一瞬、胸のつかえが下りたような解放感を感じた。そして、その次の瞬間に私は、声を放って泣き出した。誰も何とも言わなかった（中略）私は実に恥かしかつたが、機械仕掛けのように私を襲ったその泣く^(ウ)シヨウドウは、抑える隙が全く無かったのだ。

問一 傍線部(ア)・(イ)・(ウ)のカタカナは漢字でどう書くか。解答例にならない、それぞれ①～⑩の中から正しい組み合わせとなる漢字を二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(ア)

(イ)

(ウ)

(解答例) トクテイ

- ① 得
- ② 徳
- ③ 特
- ④ 匿
- ⑤ 督
- ⑥ 帝
- ⑦ 定
- ⑧ 底
- ⑨ 訂
- ⑩ 呈

答 ③ ⑦

(ア) ヨキ

- ① 預
- ② 余
- ③ 誉
- ④ 予
- ⑤ 与
- ⑥ 期
- ⑦ 機
- ⑧ 器
- ⑨ 気
- ⑩ 来

(イ) ギゼン

- ① 疑
- ② 義
- ③ 宜
- ④ 偽
- ⑤ 欺
- ⑥ 然
- ⑦ 前
- ⑧ 禅
- ⑨ 善
- ⑩ 全

(ウ) ショウドウ

- ① 照
- ② 生
- ③ 症
- ④ 小
- ⑤ 衝
- ⑥ 童
- ⑦ 同
- ⑧ 道
- ⑨ 動
- ⑩ 導

問二 傍線部(a)・(b)の本文中での意味として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(a) 16

(b) 17

(a) いまいました

- ① にくらしい ② わずらわしい ③ じれったい ④ はらだたしい ⑤ うつとうしい

(b) ことさら

- ① せいせい ② わざわざ ③ ますます ④ いよいよ ⑤ かねがね

問三 傍線部(1)「私にとっては肉親の父親というものは、肉のつながりの故にうとましいものであった」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

18

- ① 父親から受けた教育のせいで自分を自分で好きになれなくなった。このため、そのような自分にした父親とは無関係に過ごしたかったということ

- ② 血縁関係にあるからと言って父親と仲が良いわけではない。不満をぶつけたい気持ちを抑えていたので、父親には好感を持ってなかったということ

- ③ 自分の良くないところは父親から受け継いでいるが、親子だから関係を断つことができない。そのため父親に嫌悪感を抱いていたということ

- ④ 青春期に入ると厳しい父親とはうまく話ができず気持ちが通じなくなった。いまさら父親に親切にしようという気持ちにはなれなかったということ

- ⑤ 良いところも悪いところも父親とはよく似ている。よってそのような親子の間ではできるだけ距離を置いたほうがよいと判断したということ

問四 傍線部②「私の憂い、私の悲しみは、不透明な汚れたものになり」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

19

- ① 父親の病状を心配し危篤を悲しむ気持ちはあるものの、東京で詩人として生活するためには今父親に死なれては困るという自分勝手な気持ちも芽生えてしまったということ
- ② 父親が死んでしまうことに対する悲しい気持ちはあるものの、それを打ち消すかのように父親との不仲に根ざした嫌悪と拒絶の気持ちがわきあがってきてしまったということ
- ③ 危篤状態にある父親を思いやり悲しむ気持ちはあるが、一方で、東京の大学をやめて働かなければならないということへの不満がふくらんできてしまったということ
- ④ 父親の病状を悲しむ気持ちがあるものの、母親や弟妹の今後の生活が成り立つかどうかを心配する気持ちが生じて、父親への思いに集中できなくなってしまうということ
- ⑤ 家族のために働いてきた父親を失う悲しい気持ちと、これで父親との和解の機会が失われるという落胆の気持ちが混ざり合って、自分でも理解できない感情に変化してしまったということ

問五 傍線部(3)「私の感情はもう溢れ出して、自分の意志で涙を留めることができなかった」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

20

- ① 母や幼い弟妹のために、父親には何としてでも死なないでほしいと思ったから
- ② 偶然にも同席した新興宗教の説教師の話聞いて、とてもありがたいと思ったから
- ③ 父親から受けた愛情に気づかなかった自分の愚かさをとても恥ずかしく思ったから
- ④ 父親が息子の自分から愛情を受けることなく死に向かうことに自責の念を覚えたから
- ⑤ 父親には誰にも迷惑をかけずに死んでほしいという願いが大学生らしくないと思ったから

問六 傍線部(4)「やり切れない思い」とあるが、なぜ「私」はそのような思いをしたのか。その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

21

- ① 説教師の言葉は「私」の感情に何も影響を与えなかったにもかかわらず、説教師は効果があったかのような自慢気な態度をとったから
- ② 説教は「私」が涙を流したきっかけでしかないのに、説教師は自らの話が「私」に心を入れ替えさせたと思い込んでいたから
- ③ 「私」が父親に対して生理的な嫌悪感を抱いていることを、新興宗教の説教師がひどくとがめているように思ったから
- ④ 「私」が宗教的に改心したのは、新興宗教の説教師の話のおかげではなく、自らが持つ善心によるものであると思ったから
- ⑤ 説教師は自分の説教が効果的だと断言していたが、「私」自身は話の内容の真意をほとんどつかみとれていないと感じていたから

問七 傍線部⑤「私の心の破れ目が、この男の話で刺戟された」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

22

- ① 説教師の話は新興宗教の教義に関する一般的なものであったとはいえ、自分に対しては死にかけている父親への同情の気持ちを生じさせるものになったということ
- ② 説教師の話し方は聞く人をととも引き付けるものであったので、おのずと話に聞き入ってしまい、父親が危篤であることを率直に悲しむ気持ちが生まれたということ
- ③ 万人に人の道を説く説教師の話は通俗的とはいえわかりやすかったので、いまの生活をあらためて父親の死を乗り越えたいという気持ちが大きくなったということ
- ④ 説教師の話は、分かりやすく理解しやすかったので、父親に反発する気持ちを持っていたとはいえ、父親の危篤に際して優しい気持ちが心のなかで広がったということ
- ⑤ 嫌悪していた父親が危篤であるという知らせによって生じていた心の動揺が、自分の軽蔑する男の話によってではあれ、抑えられないほど大きくなったということ

問八 傍線部(6)「私は前にも、中学校の教師をしていた時、酒席で意地の悪いことを同僚の中年の教師に言われた時に泣き出したことがあった」と回想しているが、その場面が文章(B)に描かれている。その時、「私」が泣き出した理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

23

- ① 詩人として生活してゆけるかについても心配をしていたが、詩人として生活できる人は東京でもまったくいないと言われたから
- ② 東京で活躍している詩人は自分に比べて才能がたいへん劣るのではないかと思っていたところ、そのとおりで言われたから
- ③ 東京で活躍する詩人と比べても自分にはかなりの才能があると思っていたが、それとは正反対のことを言われたから
- ④ 自分と同じような才能を持つ人が東京には多くいるのではないかと不安に思っていたところ、そのとおりのことを言われたから
- ⑤ 自分と同じ才能を持つ人は東京にはそれほどいないと思っていたが、そうではないと何も知らない同僚から言われたから

問九 作者は主人公をどのような青年として描いているか。本文の内容と一致するものを、次の①～⑥の中から二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

24

- ① 説教によって改心したと新興宗教の説教師に思われることで屈辱感を感じているように、自分はほかの人から影響を受けて動揺するような人間ではないという強い自尊心を持っている青年
- ② 危篤である父親の死後、東京での「詩人としての生活」をあきらめて郷里にもどり、残される母親や弟妹を扶養するようなことは絶対にしたくないという自分のことしか考えられない青年
- ③ 父親が危篤であるという知らせに激しく動揺し、父親の死後に残されるだろう弟妹のためにこれまで以上に働かなくてはならないと思うなど、肉親に対して強い愛情を持っている気持ちの温かい青年
- ④ 東京で「詩人としての生活」を過ごすうちに、郷里に住む両親や多くの弟妹と疎遠になり、その結果、父親の危篤の知らせを聞いても悲しんでおれず、これから母親や弟妹とうまくやってゆけるか心配する青年
- ⑤ 父親の深刻な病状や父親の死後に残される弟妹の面倒など、自らの「詩人としての生活」の妨げになることに対して苛立ちを感じているが、同時にそのような感情を利己的なものとして嫌悪する一面も持つ青年
- ⑥ 気分にもらがあり不機嫌になることが多かったため、中学校に勤めていたときも不機嫌な気持ちをあからさまに同僚にぶつけたりして、かえって嫌がらせをうけるなど、職場の人間関係に苦しんでいる青年

Ⅲ 以下のそれぞれの設問に答えなさい。

問一 次の(1)～(3)に示した熟語の対義語を完成するために、解答例にならない、それぞれ①～⑧の中から正しい組み合わせとなるものを二つ選び、
 順番は無視して、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(解答例) 拡大 ↑ ↓

- ① 小
- ② 尺
- ③ 縮
- ④ 弱
- ⑤ 減
- ⑥ 贈
- ⑦ 刷
- ⑧ 少

(1) 真実 ↑ ↓

- ① 理
- ② 錯
- ③ 信
- ④ 偽
- ⑤ 無
- ⑥ 乱
- ⑦ 虚
- ⑧ 迷

(2) 促進 ↑ ↓

- ① 小
- ② 鈍
- ③ 速
- ④ 縮
- ⑤ 制
- ⑥ 化
- ⑦ 減
- ⑧ 抑

(3) 陳腐 ↑ ↓

- ① 特
- ② 斬
- ③ 微
- ④ 少
- ⑤ 新
- ⑥ 貴
- ⑦ 妙
- ⑧ 別

(1) 25

(2) 26

(3) 27

答 ① ③

問二 次の(1)～(3)の四字熟語の空欄に入る漢字を、解答例にならいそれぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(解答例) 三□四温

- ① 漢
- ② 乾
- ③ 甘
- ④ 寒
- ⑤ 閑

(1) □ 然自若

- ① 待
- ② 怠
- ③ 泰
- ④ 体
- ⑤ 滞

(2) 山□水明

- ① 紫
- ② 姿
- ③ 至
- ④ 視
- ⑤ 脂

(3) □ 謀遠慮

- ① 審
- ② 心
- ③ 神
- ④ 深
- ⑤ 信

(1)

(2)

(3)

答 ④

問三 次の(1)・(2)の慣用句の意味として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1)

(2)

(1) マゴにも衣装

- ① 自分に負けないくらい着飾ってあげたいと思うほど孫はかわいいということ
- ② 馬の世話をする人たちも儀式では正装するように、時宜に応じた服装をすること
- ③ 子馬に衣装を着せて子どもの成長を願う儀式から転じて、子どもの成長を願うこと
- ④ 我が子同様、孫にも衣服に至るまで面倒をみるなど、家族愛が深いということ
- ⑤ どんな人であっても、その外面を飾るならば、立派な人に見えるということ

(2) 濡れ手でアワ

- ① 一所懸命やってもなかなか成果が上がらないこと
- ② かぶれることから、安易にするべきではないこと
- ③ 苦労することなく大きな利益を手に入れること
- ④ 一時の戯れに時間の無駄遣いをしてはならないこと
- ⑤ 苦労して得た利益もすぐに失われてしまうこと

問四 次の(1)・(2)に示した文章の中で、敬語表現が適切でないものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1)

33

(2)

34

(1)

- ① 先生は、皆さまとは別に、外で昼食をおとりになるそうです。
- ② 時間になりましたら、宴会場において、夕食をいただいでください。
- ③ スープはとても熱くなっておりますので気を付けてお飲みください。
- ④ お送り頂いたケーキは、母と一緒にとてもおいしく頂戴致しました
- ⑤ お召し上がりになった後、容器はおみやげとしてお持ち帰りください。

(2)

- ① 秘仏は今拝観できないということです。
- ② 先生の傑作を見せていただきました。
- ③ 大先生もあなたの作品を拝見なさいましたか。
- ④ あの有名な壁画はもうご覧になりましたか。
- ⑤ それでは確かな証拠をお目にかけますよう。

